

レントゲン装置が

新しくなりました。

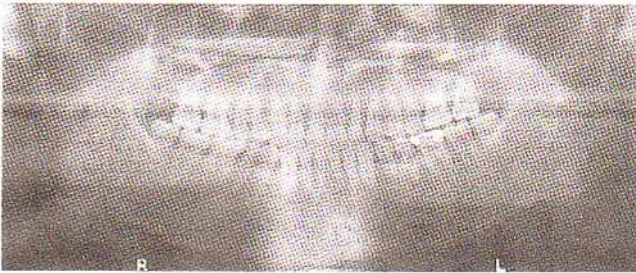
お気づきの方もいらっしゃると思いますが、レントゲン装置が新しくなりデジタル化されました。治療のチニアにモニターが付いたのはコンピュータ上で画像を見るためのものです。

この度新しくした装置には歯科用コーンビームCTが備わっています。医科で使用するCTと違いお口の中という狭い範囲に対応したCTなので少ない被爆量でたくさん情報を得ることができます。

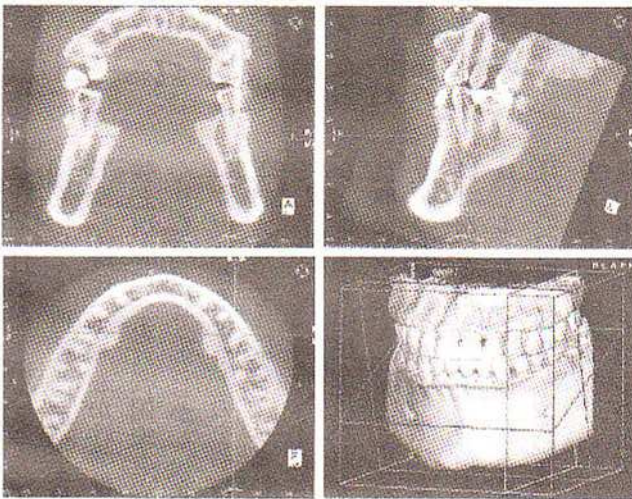
また、従来通りのお口全体を写すパノラマレントゲン、部分的な歯の細かい写真であるデジタル写真もフィルム式のものデジタル化することで、より鮮明で見やすい画像が得られるようになります。さらにレントゲンにはつきものである被爆量もかなり減少させることができます。

では新しい装置では何ができるのでしょうか。

デジタルパノラマ



I-mode (インプラントCTモード)



右下：3Dによる立体画像 左上・左下・右下：それぞれ断面像

セファロ側面2.9秒



CT装置が加わったことで、従来は

院外の別の施設に撮影をお願いしていたインプラントの術前検査を院内で行えるようになりました。CTではフィルムのレントゲンのように2次元的な情報ではなく、立体的な3次元の情報を得ることができると骨の中の状態や、神経や血管の位置関係などがわかります。現在ではインプラントの治療計画には必要不可欠なものになっていくので治療の前に必ず撮影していただくようにしています。

他にも歯牙の周囲の骨の情報を得る

ことで歯周病の進み具合が詳細に診断

できるようになったり、根管治療(歯の根この神経を治療します)での難症例が把握できるようになったり、親知らずや過剰歯の抜歯などで神経と歯の位置関係を正確に把握することができたりと様々な治療に役立てることができるようになりました。

また、パノラマレントゲンやデンタル撮影でも撮影時間が短縮されフィルムの現像時間が無くなった分すぐに画像を見ることができるようになりました。撮影時間が短いので被爆量も軽減させる

ことができました。

矯正の診断に必要なセファロ(規格写真)も同様に時間短縮と被爆量が軽減されました。他にもコンピュータ上で画像を処理することでさまざまな診断に使用できるようになりました。

道具ばかりをそろえても使いこなさなくてはなりません。私達スタッフにとってもたくさんさんのメリットがあります。それを治療に反映することで皆様にも役立つものになると思っています。

被爆量という言葉に敏感になってしまいうのですが、撮影に関しての疑問がありましたら気軽に尋ねてください。

歯学博士 藤崎 玲奈